



施設だより

ひこね市文化プラザ ☎26-8601 FAX 26-8602
2月の休館日： 1月、8月、15月、22月

- 2月6日(土) 18:30~ 金亀亭第5回落語ライブ
指定 柳家さん喬 喬太郎 親子会
◎さん喬・喬太郎の話芸をお楽しみください。
会場にて、4月27日(火)「立川談春独演会」特別先行販売します。
- 2月13日(土) 14:00~
自由 エコーメモリアル・チェンバー
オーケストラ演奏会
- 2月21日(日) 14:00~
自由 子どものためのサロンコンサート第2回
「Piano × Piano」
出演：水野雅子(ピアノ)、高木充江(ソプラノ)、
今堀智子(ピアノ)
自由 大人500円、中学生以下無料(定員：100人)
- 3月14日(日) 14:00~ 大阪音楽大学出張講座
自由 オペラ物知り講座inひこね vol.3「蝶々夫人」
- 3月15日(月) 19:00~
指定 ザ・ジェイド春コンサート2010
- 4月25日(日) 15:00~ ミュージカル
ラスト・ファイヴ・イヤーズ
演出：鈴木勝秀、出演：山本耕史、村川絵梨
指定 S席6,800円、A席6,000円【2月11日(木祝)発売】
- 4月27日(火) 19:00~ 金亀亭第6回落語ライブ
立川談春独演会
指定 3,500円 【2月7日(日)発売】
- 5月3日(月祝) 15:00~
指定 宮川彬良&アンサンブル・ベガ
◎極上の演奏とトーク！彼らがついに彦根にやってくる！
一般4,000円、
学生3,000円(限定30席 座席エリア指定)
- 5月21日(金) 19:00~
指定 岡安芳明カルテット ミーツ 小林桂
◎彦根のオリジナル曲を含むCD発売記念コンサート！
指定 3,800円 【2月4日(木)発売】
- 6月12日(土) 18:30~ 劇団四季ミュージカル
ソング&ダンス55ステップス
SS席8,000円、SA席7,000円、A席4,000円、
B席2,000円 【2月21日(日)発売】

インターネットでのチケット購入が可能になりました。
アクセス先は、<http://bunpla.jp/> クレジットカードでの
決済や、セブンイレブンで引き取ることができます。

チケットのお申し込み、お問い合わせは
チケットセンター ☎27-5200 (9:00~19:00)

彦根城博物館 2月の休館はありません。
※2月3日(水)~同5日(金)は展示替え
のため、展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30~17:00 (入館は16:30まで)

直弼発見! 巻の10

2月6日(土)~3月9日(火)

「弥千代の雛と婚礼調度」

直弼の二女・弥千代の雛道具を一堂に公開。併せて、高松松平家に嫁いだ際の婚礼調度も展示します。



▲弥千代の雛道具(三棚・貝桶)

テーマ展

ギャラリートーク

「弥千代の雛と婚礼調度」

2月6日(土) 14:00~15:00

解説：本館学芸員 小井川 理
※事前申し込みは不要です。当日、館内講堂
にお集まりください。

観覧料が必要です

直弼のころ

幕末の大老、井伊直弼(1815~1860)は、国政を担う政治家として知られる一方、茶の湯や国学、禅、居合などにひたむきに取り組む、文化人としての面をあわせ持っていました。このコーナーでは、直弼ゆかりのさまざまな作品を集め、その人となりを紹介いたします。

2月4日(木)~3月8日(月)

重要文化財

井伊直弼書状 長野義言宛て

世継として江戸にあった直弼が、国学の師である長野に宛てた手紙。和歌を添削してもらったお礼



みずほ文化センター催し物 太鼓ユニット 無限 凱旋コンサート

彦根市出身の太鼓奏者花原兄弟が結成している太鼓ユニット無限のコンサート。彦根古城太鼓も出演します。

日時 2月28日(日) 14:00開演 (13:30開場)

入場料 1,000円(全席自由)

入場券発売所 ひこね市文化プラザチケットセンター、みずほ文化センター ほか

問い合わせ先 みずほ文化センター☎43-8111、FAX43-8112

父から子へ、受け継がれるところ

安政六年(1859)11月、井伊直弼が亭主となり、その子愛麿(のちの直憲)を客として行われた茶会がありました。当時、直弼は45歳、愛麿は12歳。愛麿は、茶人としても精力的に活躍する父直弼の高弟たちともなつて茶席に列し、正客として父にむかいました。

この茶会に用いられたのが、写真の花生です(写真1・2)。竹のまっすぐに伸びた部分を用いた素直な作りで、背面には「千とせの始」の銘、「澍露軒」の号と花押が記され、直弼自作の花生とわかります。この日の茶会は、客が茶席に入ると、まず前半に、湯を沸かす釜の火に炭を継ぐ炭手前を見て、食事をいただく。休憩ののち、後半に、濃茶、薄茶の二種の抹茶をいただくという流れで行われました。前半と後半では用いる道具が異なるため、茶会を開く亭主は、その日のその茶会のテーマにふさわしい道具を取りそろえ、客を迎えます。



▲写真2 竹花生 銘 千とせの始(背面)



▲写真1 竹花生 銘 千とせの始(正面)

実際の茶会の記録によると、当日、直

一方、炭手前で用いられた炭斗(炭や火箸などをいれる器)には、瓢箪の炭斗が使われ、銘を「教外別伝」といいました。経典や言語などによらずに以心伝心で伝わる奥義を示す禅の言葉です。また、茶会当日に出された抹茶の銘は「世々の白」。代々

弱は、茶席の床の間を彩る道具として、前半の炭手前の席に一休宗純筆の短冊を仕立てた掛け軸を選びました。短冊には、『源氏物語』23帖「初音」の中で、新たな年を迎えた祝いと変わらぬ愛を込めて、源氏の君から紫上に贈られた「薄氷とけぬる池の鏡には世にくもりなき影ぞならべる」の和歌が記されていました。後半の抹茶の席では、掛け軸をしまい、替わりに、写真の花生に白い椿をいけて床に掛けました。花生は、14代将軍徳川家茂が江戸城に入城した折の料理籠に使われた竹から作ったもので、「千とせの始」の銘とともに、新しい世の始まりを感じさせる道具です。まっすぐな姿の花生に真っ白な椿というとりあわせは、清新な印象を与えたことでしょう。

受け継がれる営みや、それによって伝えられるところを思わせる名前です。

愛麿は、この3年ほど前から、直弼の弟子たちに交じり、茶会に参加していました。父の傍らで起居を目の当たりにしながら、また、父を支える弟子たちの言葉を聞きながら、自らも茶会の亭主として客をもてなすまでに成長していました。

茶会に集った人びとは、「一期一会」の場で、亭主と正客としてむかい合う直弼と愛麿の姿に、師から弟子へ、父から子へ、連綿と受け継がれる茶の湯のこころを見出したことでしょうか。何かが新しく始まる期待や、世を継いだ営みにより紡がれていくこころが、この日の茶会には込められていたのかもしれない。(彦根城博物館学芸員 小井川 理)

写真の「竹花生 銘 千とせの始」は、特集コーナー「直弼のころ」で、2月4日(木)~3月8日(月)まで展示します(期間中無休)。

ときの玉手箱

博物館からのメッセージ

